

今回(10月15日)は、盛唐の詩人・王之渙の詩2首でした。王之渙(688年～742年)は李白や杜甫より少し年長で、植田先生によりますと李白に似ていて役人には向かなかったとのこと。県の「主簿しゅぼ」という下級役人に就いたのですが、周回とうまく行かず職を辞して15年間も無官の時代があったのです。科挙にも何回も挑戦したようですがとうとう合格できませんでした。

ただ詩の仲間との付き合いはいろいろあったようで、特に高適こうせき(702頃?～765年)や王昌齡おうしょうれい(698～755年)とは飲み友達(?)でいくつものエピソードが残されているそうです。例えば彼らは宴席でお互いに作った詩(歌)を妓女に歌わせて優劣を競ったりしました。王之渙は当時の流行歌の作詞家として知られ、彼が一首作ると楽士たちが争ってそれに曲を付けたと言います。

残念なことに王之渙の作った詩は6首しか残されていません。しかし今回ご紹介する詩2首によって彼の詩人としての名は永遠に歴史に残ることになりました。

ではまず「登鶴雀楼」(鶴雀楼に登る)から見てみましょう。「雀」はテキストによっては「鵲」となっているものもあります。ちなみに鵲はカササ

ギのことです。カササギといえば、ご承知のように年一回七夕の夜、牽牛と織姫がデートする時鵲が翼を並べて天の川を渡すと言う「鵲の橋」として有名ですね。「鶴」はコウノトリのことです。コウノトリが楼閣に巣を作ったのでその名が付いたとも言われています。鶴雀楼のあたりはその昔コウノトリやカササギが優雅に飛び交っていたのでしょうか。

その鶴雀楼は山西省・永済県の黄河を望む地にあった三層の楼閣だったそうですが今は残念なことにありません。黄河は柄杓を伏せたような形をしています。柄杓の柄の根本にあたるころにあったそうです。この楼閣に登って詠んだ詩です。

植田先生は最初の起句と承句について、「太陽は東から西に運行しますが、それとは逆に中国の大河はどれも西から東に流れていく。両者を対比する雄大で悠久な自然の描写は素晴らしい」と解説され、さすがに王之渙だと全員納得。更に最後の結句「更上一層楼」は中国では生徒が試験でいい点を取った時など、先生は、「『これに満足せず更に頑張れ!』といったりする時使ったりするんだよ」とニコニコしながら教えてくださいました。

dēng guān què lóu 登鶴雀楼

wáng zhī huàn
作者：王之渙

bái rì yī shān jìn,
白日依山尽，
huáng hé rù hǎi liú。
黄河入海流。
yù qióng qiān lǐ mù，
欲穷千里目，
gèng shàng yī céng lóu。
更上一层楼。

鶴雀楼に登る

王之渙

(鶴雀楼に登って眺めると)夕陽が山の彼方に沈んでいくの見える
(眼下に望む)黄河の流れが渤海に向かって流れていく
(この素晴らしい眺望に感動した私は)千里の彼方の大地まで見渡したい衝動にかられ
もう一段上の階に登って行った

涼州詞

作者：王之渙

huáng hé yuǎn shàng bái yún jiàn ,
黄河远上白云间，
yī piàn gū chéng wàn rèn shān 。
一片孤城万仞山。
qiāng dí hé xū yuàn yáng liǔ ,
羌笛何须怨杨柳，
chūn fēng bù dù yù mén guān 。
春风不度玉门关。

涼州詞

王之渙

のぼ
黄河上れば白雲の 果て無き彼方
わび ばんじょう そび
孤城侘しく万丈の 山聳えたり
ようりゅう こてき
手向けに手折る楊柳の 胡笛の調べ無くもがな
ぎよくもん かん
春は至らじ 玉門の関

「詩や文章の本来の意味から離れ、その中の一部だけ利用する『断章取義』だね」とも。

次に「涼州詞」に移ります。この詩は唐詩のジャンルにある「辺塞詩」の一つだそうです。彼は山西省・新絳県の出身で辺塞詩人として知られています。涼州は中国にかつて存在した州で、現在の甘肅省、寧夏回族自治区一帯の辺境の地でした。この地方に伝わる民謡をモチーフとして作られたのが「涼州詞」です。「涼州詞」という題名の詩は多く作られていますが、王之渙のこの詩もその一つです。

解釈の前に言葉の説明をしましょう。「孤城」は孤立した砦のこと、「仞」は古代の長さの単位で一仞は八尺に相当しますが、「万仞の山」は誇張表現です。「羌笛」は寂しく響く異民族のタテ笛。胡笛ともいいます。「楊柳」は折楊柳（柳の枝を折って旅立つ人へのはなむけに差し出す）のこと。後に楽府題（音楽の題名）になりました。ここでは胡笛による別れの曲です。なお結句の「春風」は「唐詩三百首」によるものです。「唐詩選」では「春光」になっています。また、テキストによっては題名が「出塞」になっているものもあります。

この詩は、特に転句と結句（3～4句目）の解釈が少し難しく参加者の皆さんはいろいろな角度から質問されましたが、咀嚼して自分なりに納得するには少し時間がかかるようです。植田先生によ

りますと、この詩は現地での体験を踏まえて作られたものではなく、流行り歌のスタイルに法って作られたもので、「正に演歌の世界のような歌と言えますね」とのこと。演歌の心でもって想像をたくましくして解釈する必要がありそうです。ここはやはり植田先生のお力をお借りしましょう。講座終了後、先生から頂いた訳詩でじっくりと味わってみたいと思います。

辺境の地の寂しさ、その雰囲気がよく伝わってきますね。さらに噛み砕いた下記の状況説明を頂きましたので、最後にここに記して10月の講座報告といたします。



黄河を遠く遡っていけば、遙か白雲の彼方に達するといわれる。

荒涼とした砂漠の中に、辺境守備の為の小さな砦があり、そこにはさらに高い山がそびえ立っていると聞く。

そんな淋しいところに旅立つ君よ。別れを惜しむ証として、昔の人は、柳の枝を折って旅立つ人に手向けたそうだが、その故事をもとにして作られた羌笛の悲しげな調べなど、今さら何の意味があろう。

遙か玉門関の彼方には、そもそも柳を芽吹かせる春風すら届かぬというのに。